

---

# 復讐と...

霧野ミコト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

復讐と…

### 【Nコード】

N00100D

### 【作者名】

霧野ミコト

### 【あらすじ】

ここではないどこか。そこでは、魔族と人との間で戦争が起っていた。そんな中に現れた勇者。いや、勇者と呼べぬ誰か。これは、その誰かの復讐の結末。

真っ赤な鮮血。

ばらばらに散らばる肉片。

それらをあざ笑うかのように貪る。

僕の目の前では惨劇が起きていた。

全てが麻痺していた。

まるで、自分の体が自分でないように思えた。

まるで、今見ている光景が単なる映像のように思えた。

全てが機械的で、現実味を帯びていなかった。

ただただ、壊れた世界のようにしか思えなかった。

けれど、みんな死んでいった。

父さんも母さんも兄弟も・・・

そして・・・僕の恋人も・・・

ずたずたになった体を引きずりながら、目の前に転がる物を見る。

先ほどまではそこにあった生命体。

魔王と呼ばれていた存在。

それを僕は殺した。

いや、壊した。

全身全霊の力で、自分の体が壊れることをいとわず、懸命に壊した。

結果として、魔王は死んだ。

別に僕が特別強かったわけじゃない。

別に僕が特別魔術の才能があったわけじゃない。

別に僕が神に祝福された勇者だったわけじゃない。

僕が唯一あつたのは、復讐心。

僕の前に不幸を産み落とした現況に対する憎悪。

それが人一倍強かっただけ。

だから、血を吐こうが、腕の骨が折れようが、死に掛けようが、僕

は必死になつて強くなつた。

魔王を殺すため。

そして、今復讐は終わった。

ここにくるまで、たくさんの魔族を殺した。

魔王を守るために、勝負を挑んできて、僕はそれを切り捨てた。存在自体が許せなかったから。

だから、冷徹に切り捨てた。

今の僕は真紅の衣をまとっている。

深い深い紅色。

僕は、奥へと進む。

部屋の奥には、時計塔がある。

一步一步上へと向かつて歩いていく。

やがて、階段を上りきり、最上階へとたどり着く。

魔界独特のどんよりとした空と生暖かい風が体にまとわりつく。だけど、それが逆に心地いい。

今の僕には。

地上を見してみる。

そこには、累々たる死体が並んでいる。

全て僕が築いた山だ。

僕は腰にかけていた剣を抜く。

たった一本の剣でここまで来た。

たいした、業物じゃない。

いいものは、全部勇者やら、有名な冒険者が持っている。

単なる、一般人でしかなかった僕が持てるわけもなかった。

僕はその剣を空にかざす。

刀身は、すでにぼろぼろになり、刃こぼれをしている。

数々の魔族を殺してきた結果だ。

そして、振り返る。

何かの気配を感じたからだ。

ゆっくりとした、動作で振り返ると、そこには、一人の少女がいた。

真紅の瞳と闇色をした髪をした小柄で華奢な少女。

この場には、到底不釣り合いな少女だ。

「お前が、父上を殺したのだな」

その少女がそう尋ねる。

だけど、その言葉で、少女の存在が分かる。

つまり、この少女もまた、魔族なんだろう。

そして、この魔宮にいるということは、魔王家の者、しかもこの態度の大きさから、まず魔王の娘とみて間違いないだろう。

「そうだ。お前の父親を殺したのは、この僕だ」

ならば、その父を殺したのは、僕だ。

ここにいる、魔族を殺したのは、僕以外誰もいない。

僕は、一人でここに来たのだから。

「ならば、死ね!!」

魔王の娘が、剣をきつと握りなおすと僕に突進してくる。

おそらく、こういうことの経験なんてないんだろう。

ほかに何も見えていない。

これなら、誰でもかわせる。

彼女と同じように経験のないものでない限り。

そして、僕だってよけられる。

彼女が突進してくる。

もう、目の前まで来ている。

それを僕は……

よけなかった。

体の大きさからだろう、彼女の剣は僕の脇腹に突き刺さる。

その剣はそのまま体を突き抜ける。

「ごふっ」

どうやら、内臓をやられたらしい。

僕は、血を吐き出す。

少女は、その光景を啞然としていた。

その顔色は青く、体は震えている。

「怖いのか？」

僕は、そんな彼女を見てそうたずねる。

「そ、そんなわけがあるまい！！私は、誉れ高い魔王家の王女だぞ！」

けれど、そんな問いに彼女は気丈にもそう答える。

答えるが、その声は震えている。

そんな姿を見て、僕は・・・

「そう気を張るな。別に馬鹿にはしない。僕だって、初めて、殺したときは、怖かったものだ。」

僕は、昔の僕を思い浮かべていた。

必死になって、僕は力を手にいれた。

そして、旅に出た。

魔王を殺すため。

一振りの剣だけを携えて。

そして、突き進んでいく中、初めて、魔族に遭遇した。

もちろん、即座に応戦して、勝利を手にした。

必死になって、剣を振るい、魔法を放った。

そして、殺した。

だけど、その後、自分の手を見て思わず恐怖した。

自分の手は真っ赤に染まっていた。

魔族の返り血で。

そのときは、本当に怖かった。

自分と言う存在がついに、汚れてしまったと。

そう、自分も魔族と同じところにまで堕ちたのだと。

だけど、それでも、僕は止まらなかった。

復讐があつたから。

たとえ、どんなに汚れたとしても。

たとえ、みんながそれを望んでいなかったとしても。

僕は、魔族を滅ぼさないと気がすまなかった。

だから、立ち止まらず、冷酷に切り捨てていった。  
そして、今こうして僕はここにある。

「殺すことに痛みを、恐怖を感じなくなってしまうえば、そこでおしまいだ。その点に関して、魔王は立派だった。同族が殺すことに快楽を得ることに憂れいていた。それを悲しんでいた。だから、お前は間違っていない。殺すことに恐怖しているお前はな」

僕はそういうと、少女から間を取る。

「貴様、何をするつもりだ!!」

そして、壁のへりによじ登ったところで、少女が僕に向かって叫ぶ。僕が何をするのか分かっているんだろう。

「僕は、今日まで復讐のために生きてきた。魔族を恨み、滅ぼすことだけが生きが이었다。家族も、恋人も殺され、一人だった。だから、生きがいなど、それしかなかった」  
思い出す。

全てを失い、一人きりになったときのことを。

「けれど、それも終わった。だから、僕には、もう生きる必要も理由もない。君も分かっていたはずだろう？僕に勝てるわけがないなんて」

「……………」

少女は、僕の問いに対して答えなかった。  
けれど、それは無言の肯定だった。

彼女も分かっていたんだろう。

魔王ですら、かなわなかった僕に、勝てるとは思っていなかったの  
だろう。

「僕はそれでも、受けていた。それは、なぜか？君の復讐を果たせてあげたかったから。せめてもの罪滅ぼしさ。だけど、君には、その勇気がない。なら、どうする？答えは簡単だ!!」

僕は、突き刺さっていた、剣を引き抜く。  
とたんに、大量の血が吹き出る。

意識が飛んでしまいそうになるが、それを振り切る。

「ここで、死ねばいい。自分で命を絶てばいい」

そして、剣を、床にほうり捨てると、そのままへりから飛び降りる。床と空が反転する。

物理法則に従い僕の体が地面へと向かって落ちる。

いつもなら、死ぬことはない。

これぐらいの高さぐらいなら、らくらく生還できる。

だけど・・・

今は生き残るつもりはない。

だから・・・

世界は暗転した。

何もない。

世界には何も無い。

ただ、延々と闇が続く。

これが虚無というものののだろうか。

もし、そうならば、僕は、天国でも地獄でもないところに来てしまったんだろう。

別にかまわなかった。

僕はたくさんものを殺した。

僕の手はもう、真っ赤に染まり、罪人以外なんでもない。いまさら、綺麗事を言うつもりはない。

目を瞑る。

まだ、幸せだったときのことか脳裏を掠める。

両親はお小言ばかり言っていた。

兄弟たちは、僕の後ろばかりついてきていた。

…そして、恋人は……

彼女は、笑っていた。

僕の傍でいつも笑っていて、幸せそうに穏やかに暮らしていた。幸せ以外なんでもなかった。



満たされていた。

そして、僕の意識はまどろみの中に消えて行った・・・

次に気がついたとき、僕は、見知らぬ部屋にいた。

天蓋つきの豪華なベッドの上で寝ていた。

わけも分からず、起き上がる。

脇腹のあたりをさすってみるが、痛みはない。

どうやら、傷はいえてしまったみたいだ。

…と、それはいいとして、僕はどうしてこんなところにいるんだ？

それが不思議だった。

ドアを開けて外に出てみる。

そこには、ぼろぼろになった、廊下がある。

見たことある光景…

そうだ、ここは、僕が壊した。

魔族との戦闘中に。

ということは、ここは……

「よかった、目覚めたのだな」

結果が帰着する頃に、僕の目の前に女が現れた。

魔王の娘だった。

「私が、処置を下そうとしたときは、すでに半死人だったんだぞ？

それを、蘇生させようと思ったら、そうとうきつかったんだからな」

彼女は、僕を部屋に押し戻すと、ベッドに押し倒す。

寝ろということなのだろう。

だが、わけが分からなかった、

なぜ彼女がそうするかが分からなかった。

「私のことが、おかしいか？」

それが、見え見えだったんだろう。

答えるようにして、話し始めた。

「私も自分自身のことを滑稽に思ったさ。貴様のことを助けようとしていた時に。だが、それでも、どうしても、やめられなかった。

それは、多分分かっていたからなんだろう。これが因果応報であることにな」

そういうと、彼女はため息をつく。

すでに、達観しているのだろう。

全てを。

「私たち一族は殺しすぎた。自分の快樂のために。だから、こういうことは必然だし、その王である、私の父上が殺されるのもまた、然りだ。だが、それでも、私は認められなかったのだろうな。私は、父上が好きだったから。だから、好きなものを殺されたから、頭で分かっていても、納得できていなかったんだと思う」

それは、誰だったそうだろう。

自分の大切な存在が頃去ればそう思うに違いない。

因果応報。

どんな綺麗事を言っただとしても、そう簡単に割り切れるものでは決してない。

「だから、貴様を殺そうとした。だけど、結果はできなかった。むしろ、貴様が言うとおり怖かった。私は、今まで生き物を殺してきたことがなかったからな。周りで苦しんでる中で、私は、ずっと温室で育っていた。外に出ることなく、安穩に生きていた。だから、何も知らなかった。だから、思った。そんな私に、復讐をする権利が果たしてあるのか、と。何も知らずに、のんびりと暮らしてきた私に、そんな権利があるのかと。考えに考えて、結局こうなったわけだ」

彼女は最後にそういうと、僕の額に触れた布をおく。

そんな彼女を見て、僕は、なぜか、穏やかになった。

大切な人が死んでから、枯渇し、修羅と化した僕の心に初めてぬくもりの火がともった。

そつと彼女に手をかざす。

「これから、君はどうするんだい？」

「わからない。だが、きっと殺されるだろうな。私は、結局どこま

でいっても魔族だからな」

彼女の答えは、やはり全てを達観したものだった。死を覚悟したときの僕と同じようなものだ。

そんな彼女の手を取る。

「なら、僕についてこないか？僕が修練のときに使っていた小屋がある。あそこなら、人も誰も来ない。そこで、ひっそりと暮らさないか？」

彼女も罪人。

何も知らずに、のんびりと生きてきた。

だから、罰がいる。

ならば、僕がそれを下そうと思った。

僕が、この世界を滅ぼしたのだから、それをするぐらいの権利はあってもおかしくない。

「貴様は、それでいいのか？私は、魔族なのだぞ？」

彼女は、僕の問いかけに対して、おびえるように尋ね返す。けれど、その声の調子はどこか期待にあふれていた。

「かまわないよ。どうせ、僕も罪人だからね。ちょうどいいだろう」そんな彼女の問いかけに答えてやる。

せめてもの償いのために。

殺し続けてきた自分の手を洗うために。

決して、綺麗になることなどない自分の手を…

(後書き)

とりあえず、少ないのは寂しいからと次々とアップさせてるけど……  
やりすぎかしら???

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0010d/>

---

復讐と...

2010年12月29日21時07分発行